

修士論文（要旨）

2012年1月

在宅高齢者を介護する家族の同居生活継続の自信に関する研究

指導 直井道子 教授

老年学研究科

老年学専攻

210J6010

杉山 修

目 次

I	はじめに	1
II	先行研究と課題	1
III	研究目的と分析枠組み	3
	1. 研究目的	3
	2. 分析枠組み	3
IV	対象と方法	4
	1. 調査対象	4
	2. 方法と期間	4
	3. 調査内容	4
	1) 従属変数	4
	2) 独立変数	4
	4. 分析方法	4
	5. 研究における倫理上の配慮	5
V	結果	5
	1. 同居家族の基本属性	5
	2. 高齢者の基本属性	5
	3. 同居家族の介護状況	5
	4. 評価尺度の内部構造と信頼性の検討	6
	1) 介護肯定感評価項目の構造と信頼性	6
	2) 介護負担感評価項目の構造と信頼性	6
	5. 分析1結果（介護肯定感及び介護負担感に関連する要因）	6
	1) 相関係数	6
	2) 重回帰分析	7
	6. 分析2結果（同居生活継続の自信に関連する要因）	7
	1) 相関係数	7
	2) 重回帰分析	7
VI	結論と考察	7
	1. 同居家族の基本属性	7
	2. 高齢者の基本属性	8
	3. 同居家族の介護状況	8
	4. 分析1（介護肯定感及び介護負担感に関連する要因）	9
	5. 分析2（同居生活継続の自信に関連する要因）	9
	6. 同居家族への支援方法	10
	7. 本研究の限界	11
VII	謝辞	11

参考文献

図・表

資料

I はじめに

近年、医療保険施設での入院日数の短縮、療養型病床のベッド数減少などの問題に伴い、在宅場面にて介護を必要とする在宅高齢者は、増加の一途をたどっている。これに伴い、在宅にて高齢者の介護・お世話を行う同居家族の負担が問題となっている。この様な背景から、在宅高齢者への直接的支援の他に、同居家族への支援を平行して行うことが必要である。

II 研究目的

デイケア施設を利用する在宅高齢者のお世話・介護を主にしている同居家族に対して、介護肯定感及び介護負担感に関連する要因は何かを明らかにするため、同居家族の基本属性と介護における主観的要因、および高齢者側要因の関係について分析する(分析1)。続いて同居生活継続の自信と介護肯定感、介護負担感、その他の関連要因の関連性について分析を行ない、同居家族が今後、同居生活継続の自信低下につながると思われる要因を明らかにする(分析2)。

分析1、2の分析結果から、同居生活継続の自信につながる同居家族に対する支援方法について考察、立案を行なうことで、在宅高齢者の在宅生活継続につながる指針を得ることが本研究の意義である。

III 対象と方法

1. 対象

介護老人保健施設に併設されるデイケア施設の利用者であり、介護保険における要支援、または要介護の介護認定を受けている在宅高齢者の同居家族である。同居家族の選択は、在宅生活にて主に高齢者のお世話・介護をしている家族とした。

2. 方法と調査内容

個別記入式の質問紙法と施設所有の利用者関係書類から情報収集を行った。調査時期は平成23年の4月と9月であり、調査期間は約1ヶ月である。

調査内容と変数の測定方法は以下の通りである。同居生活継続の自信は、順序尺度の5件法とした。介護肯定感は、櫻井²⁰⁾の作成した介護肯定感尺度14項目を使用した。介護負担感は、Zaritらが作成した介護負担感尺度をもとに、荒井ら²¹⁾が作成したZarit介護負担感尺度(日本語版)22項目を使用した。同居家族側要因からは同居家族の基本属性、お世話・介護にて生じる主観的要因と介護状況、在宅高齢者側要因からは在宅高齢者の基本属性を使用した。

IV 結果

1. 分析1結果(介護肯定感及び介護負担感に関連する要因)

相関係数の結果では、介護肯定感と介護負担感の間に負の相関($r=-0.414, p<0.01$)を有意に認めた。介護肯定感は、認知症の程度と負の相関($r=-0.304, p<0.05$)、高齢者との関係と正の相関($r=0.639, p<0.01$)を有意に認めた。介護負担感は、高齢者介護度と正の相関($r=0.321, p<0.01$)、高齢者との関係と負の相関($r=-0.397, p<0.01$)を有意に認めた。

重回帰分析の結果では、介護肯定感では、高齢者年齢($\beta=-0.218, p<0.05$)、高齢者の認知症程度($\beta=-0.278, p<0.05$)の2変数が有意な負の影響を示し、高齢者との関係($\beta=0.675, p<0.01$)が有意な正の影響を示した。介護負担感では、高齢者との関係(β

=-0.428, $p < 0.01$) が有意な負の影響力を示した。

2. 分析2結果(同居生活継続の自信に関連する要因)

相関係数の結果では、同居生活継続の自信は、介護肯定感と正の相関 ($r=0.484, p < 0.01$)、介護負担感と負の相関 ($r=-0.310, p < 0.05$)、高齢者との関係と正の相関 ($r=0.455, p < 0.01$) を有意に認めた。

重回帰分析の結果では、第1段階の分析として、分析1で投入した独立変数を全て投入したところ、高齢者との関係 ($\beta=0.466, p < 0.01$) が有意な正の影響力を示した。第2段階の分析として、第1段階で投入した独立変数に、介護肯定感、介護負担感を加えて投入したところ、全ての独立変数において有意な影響力を示さなかった。第3段階の分析として、第2段階の分析で用いた独立変数のグループから高齢者との関係を除外して分析したところ、介護肯定感 ($\beta=0.400, p < 0.01$) が有意な正の影響力を示した。

V 結論と考察

第1に、良好な介護肯定感の形成には、同居家族と高齢者の関係が重要であり、両者の関係を改善するための援助が必要である。そこで同居家族、高齢者間において、心理的および物理的な距離の調整につながる支援が求められる。しかし、対象者がお世話・介護を必要とする状態を余儀なくされた場合、同居家族と高齢者の距離が近すぎると、逆に同居家族の精神的消耗や時間的制約を強め、同居家族の負担を高める要因となることも考えられる。お世話・介護自体の量は容易に改善することは困難であるため、高齢者との距離を適切に保ち、ストレスからの対処を可能にすることが、同居家族の精神的負担を軽減させ、高齢者に対して肯定的な感情をもつ上で重要であると考えられる。高齢者と同居家族の状況を踏まえて、ショートステイ、通所介護などの情報提供を行い、同居家族、高齢者間における距離の調整を行うことが重要である。

第2に、介護保険制度の利用においてケアプランを作成する際、同居家族の「生活支援」についても考慮することが求められる。介護保険にて在宅サービスなどの社会資源を提供する際は、高齢者への直接的支援の他に、同居家族の精神的、及び身体的な負担軽減を目指し、「生活の質」の向上に反映できる支援を立案することも重要である。同居家族が高齢者に対して肯定的感情をもちながら、余裕をもった同居生活を送れることが求められる。そして、お世話・介護を行う同居家族自身も他の家族から支えられ、サポートを得られる体制作りを支援することが重要である。

第3に、「高齢者の関係」に対する評価手段の立案を行い、評価結果から介入手段の決定、実践を行い、在宅生活の問題解消につなげることである。研究結果から、「高齢者との関係」を良好に保ち、介護肯定感の向上につなげることが、同居生活継続の自信に反映されることが示された。「高齢者との関係」は現在までの長年培ってきた夫婦間の主観的な感情により形成されるため、第三者の視点で評価すること、その評価に基づいて介入手段を決定、実践することが妥当であるかの疑問が残るため、今後の検討課題である。まずは高齢者と同居家族の主観による評価、対処方法を優先し、そこから第三者に支援可能な介入手段を考え援助することが求められる。今後、第三者が介入できる範囲、分野でどのような支援を行うことが、在宅生活の問題解消につながるかの評価手段の立案が求められる。

参考文献

- 1)鹿子供宏・他:アルツハイマー型老年認知症患者を介護する家族の介護負担に関する研究－介護者の介護負担感,バーンアウトスケールとコーピングの関連を中心に－.老年精神医学雑誌 19:333-341, 2008.
- 2)澤口環:痴呆性疾患における介護負担感. JOURNAL OF CLINICAL REHABILITATION10:891-896, 2001.
- 3)本間昭:痴呆性老人の介護者にはどのような負担があるか. 老年精神医学雑誌 10:787-793, 1999.
- 4)筒井孝子・他:在宅高齢者に対する介護者の主観的負担と介護継続意思に関連する要因の検討. 総合リハビリテーション 21:129-134, 1993.
- 5)渡邊愛記・他:在宅脳卒中患者の介護状況と介護者の負担. 作業療法 20:116-125, 2001.
- 6)坪井章雄・他:在宅介護家族の主観的介護負担感に影響を与える要因－介護家族負担感尺度(FCS)を用いて. 作業療法 25:220-229, 2006.
- 7)里字明元:介護負担感の概念と研究の動向. JOURNAL OF CLINICAL REHABILITATION10:859-867, 2001.
- 8)原沢優子・他:介護家族の老親扶養義務感が介護継続意欲に及ぼす影響. 日本保健医療行動科学会年報 21:177-188, 2006.
- 9)上村さと美・他:Zarit 介護負担感尺度日本語版(J-ZBI)を用いた家族介護者の介護負担感評価. 理学療法学 22:61-65, 2007.
- 10)樗木てる子・他:介護結果に対する原因帰属が介護負担感に及ぼす影響:認知症介護をしている家族の場合. 老年社会科学 29:493-505, 2008.
- 11)陶山啓子・他:家族介護者の介護肯定感の形成に関する要因分析. 老年社会科学 25:461-470, 2004.
- 12)坪井章雄・他:訪問リハビリテーションにおける高齢障害者の在宅介護継続因子の検討－在宅生活継続例と破綻例の介護者の心理的側面より－. 作業療法 18:402-409, 1999.
- 13)櫻井成美:高齢者を介護する家族のためのサポートグループの効果についての研究:こころの研究 21:31-41, 2006.
- 14)片山陽子・他:在宅で医療的ケアに携わる家族介護者の介護肯定感に関連する要因の分析. 日本看護研究学会雑誌 28(4):43-52, 2005.
- 15)李文娟:在宅介護の継続希望と関連する要因. 老年社会科学 25(4):471-481, 2004.
- 16)杉浦圭子・他:在宅介護継続配偶者介護者における介護経験と精神的健康状態との因果関係の性差の検討. 日本公衛誌 57(1):3-16, 2010.
- 17)牧追飛雄馬・他:家族介護者に対する在宅での個別教育介入が介護負担感および心理状態へ及ぼす効果－層化無作為割り付けによる比較対象試験. 老年社会学 31(1):12-20, 2009.
- 18)藤本直規・他:痴呆のケアマネジメント－介護者支援の視点も含めて. OT ジャーナル 34:406-411, 2000.
- 19)佐分厚子・他:家族介護者の家族会参加による介護への適応モデル. 日本保健科学学会誌 10(2):80-88, 2007.
- 20)櫻井成美:介護肯定感がもつ負担軽減効果. 心理学研究 70(3):203-210, 1999.
- 21)荒井由美子・他:家族介護者のストレスとその評価法. 老年精神医学雑誌 11:1360-1364, 2000.
- 22)三田寺裕治:要援護高齢者を介護する家族介護者の介護ストレスに関する研究. 淑徳短期大学研究紀要 41:83-96, 2002.
- 23)新名理恵・他:痴呆性老人の在宅介護者の負担感に対するソーシャル・サポートの緩衝効果. 老年精神医学雑誌 2(5):655-663, 1991.